

カナダ・アメリカでの授業を通して見えたもの

寺 本 誠*

1. はじめに

筆者は、2008年4月27日～5月8日の12日間、日立製作所の日立日米欧教諭交流プログラム「HISTEP (Hitachi International School Teachers Exchange Program)」に参加する機会に恵まれた。本稿では、その報告と若干の所感を述べる。

「HISTEP」とは、日立製作所が日米欧地区での社会貢献活動の一環として1987年より実施しているプログラムで、日本人教諭の北米ないし欧州への派遣、欧米人教諭の日本への招聘を行い、訪問先教育現場の視察、地元教諭との懇談、体験授業、ホームステイ等を通じ、相互の社会・文化に対する理解促進を図るとともに、各参加教諭を通じてその生徒たちの国際相互理解促進も目指している。

筆者はカナダ・アメリカ地区に派遣される4名の中・高校の教諭の一人として選出され、カナダのトロント市、アメリカのケンタッキー州、ニューヨーク市の各学校を訪れた。なお、6月には逆に派遣された教諭の勤務校へ欧米人教諭が訪れることになっている。

2. カナダ・アメリカでの授業構想

「HISTEP」の最大の特徴は、参観にとどまらず、現地の学校で実際に授業を行うことにある。それはどの教科の教師であろうと、英語で授業を行うことが求められることを意味する。

一般的な英語教育の経験しかない筆者にとって大いに困難が予想されたが、社会科教師である自分ができることを考えた時、やはり日々の社会科の授業で目指している、生徒同士が協働して学び合えるような授業を実践したいと考えるに

至った。熟考した結果、日本の小・中・高校生の日常生活を示すデータを提示し、現地の生徒の生活と比較させながら討論・発表を行うという授業構想を考えた。

データとして用いたのは、日本の小・中・高校生の日常生活において大きな割合を占めるものの、例えば、携帯電話の所有率、通塾率、家庭での学習時間、放課後の過ごし方、お小遣いの平均金額等である。これらを1枚にまとめた資料を作成し、授業に臨んだ。また、導入教材として、勤務校の生徒の活動の様子や校舎の写真を撮り、拡大して持参した。

3. 実践を振り返って

最初の授業は、カナダのトロント郊外に位置するBalmoral Drive Sr. Public Schoolの中学2年生に対して行った。クラスに入ってまず目を引いたのは、生徒の多様さである。中国、インド、ベトナム、プエルトリコ、ドミニカ等、様々な文化的背景を持った生徒と一緒に学んでいることに日本との違いを強く感じた。同時に、果たして自分の授業が受け入れられるのか、不安も大いに感じていた。

当初は心配していたものの、導入として勤務校の紹介をしたり、世界地図から日本の位置を探させるクイズを行ったり、日本について知っていることを挙げさせたりしているうちに、お互いの緊張もほぐれ、積極的な反応も目立つようになった。やはり言うべきか、「日本」から彼らが連想するものとしては、マンガ、アニメ、ゲーム、車という反応が多くを占めていた。

これらのやりとりを経て、今回の学習の主題で

*お茶の水女子大学附属中学校

ある、若者の日常生活から見ると、日本・カナダの文化比較を行った。生徒を小グループに分け、予め用意していた資料を配布し、自分たちの生活と比較して特に印象に残ったデータについて自由に話し合わせた。そして、最後にグループごとに発表させ、クラス全員で共有した。

特に生徒たちの関心を集めていたのは、日本の小学生の携帯電話所有率の高さである。「カナダでは8～9年生(13～15歳)でないと許されない」と述べた生徒もいたように、携帯電話を持つことは、責任感を伴うものであるという意識が感じられた。日本の小学生は通塾率が高く、夜遅くに帰宅することもあるため安全を考えて保護者が持たせている、と説明したところ、日本の生徒が置かれている状況の一端が理解できたようだった。だが、そもそも受験制度の違いから、「塾」という概念がないため、彼らにとって小学生が遅くまで学校以外の場所で勉強していることの方が驚きは大きかったようである。この他にも、双方の国の文化を10代の目で比較した様々な意見が出され、筆者自身も学び取ることが多かった。

研修中の計5回の授業体験のうち、この文化比較の授業をカナダでもう一度、アメリカでさらに一度行ったが、ほぼ同様の反応を得ることができた。小集団での活動に慣れているため、初めて見る資料でも仲間と協力して何とか読み解き、自分たちなりに解釈しようとする姿勢がどの学校でも見られた。資料を活用しながら協働して考えさせるという目標はある程度達成できたと感じる。ただ、実際に授業をしている間は無我夢中で、現地の生徒や教師の協力で何とか乗り切ったというのが実情である。言語を介したコミュニケーションが不十分なことから、生徒の「わかりたい」という気持ちに十分応えることができず、したがって、生徒の思考を深めきることができない故のもどかしい思いをすることの方が多かった。自分の実践を冷静に振り返ることができたのは帰国後のことである。

4. 「HISTEP」を通して学び得たこと

筆者は今回のプログラム参加を通し、次の3点において特に大きな示唆を与えられた。

まず、カナダ・アメリカにおける多様性に対する寛容の精神である。両国とも、多民族国家であり、日本とは大きく社会的背景が異なっている。その中で自然に異なる文化を尊重する教育がなされていたことがとても印象的であった。

例えば、「聴く」ことが重視されていたことは、非常に有効な手立てであると感じた。ニューヨークの小学校1年生の教室で、「相手の発言を聴かないのは相手を尊重しないことだ」という指導がなされていた。これは自然に多様な文化や価値観を尊重する態度を育てることにつながると感じる。何より、こうした指導が低学年から行われていたことが驚きであった。また、教室に必ず地球儀を置く、廊下に生徒の出身国を示した世界地図を掲示するなど、一見何気なく見えるが、その背景には異なる文化を認め合う雰囲気や、幼い年代から醸成していこうとする各学校の取り組みが徹底されていると感じた。これらの実践例は帰国子女学級を有している勤務校において、多文化共生の学校づくりを進める上で大きな示唆を与えると共に、一般クラスの学級経営や生徒指導においても有効であると感じた。

二点目は、生徒たちの授業へ参加する意識がとても高いことである。これは教育をめぐる環境整備がハード面・ソフト面の両面で確立されていることが大きいと感じる。

ニューヨークの学校では「スマート・ボード」と呼ばれる、コンピュータとリンクした電子黒板が全教室に設置されていた。学習対象を生徒たちに分かりやすく示すことができるとともに、生徒がそれを使うことによって、容易に授業に参加することが可能となる。教師と生徒の双方向の学びを保証する、優れた設備であると感じた。

また、どの学校でも20人前後の少人数でクラスが構成されており、その利点を活かして全生徒への細かい指導がなされていた。グループでの活

動、ペアでの活動が盛んに授業に取り入れられており、生徒同士の話し合いや学び合いが自然になされていた。ハード面の整備は時間がかかるかもしれないが、学び合う環境づくりに向けての指導上の工夫は、十分応用できると感じた。

最後に、生徒たちが「わかる」とは何か、という原点に立ち返った問いを考え直すきっかけとなったと感じる。

授業における言語を通したコミュニケーションが不十分なため、言語に頼りきらない手立てを考える必要があったし、また、言語以外の感覚をより研ぎ澄まさなければならなかった。生徒たちも同じ思いだったであろう。普段の授業環境とは異なる分、学習内容は多くないものの、お互いが「わかる」ことについて、絶えず模索し合いながら学習を進めた結果、非常に密度の濃い時間が生まれたように感じる。

それが端的に表れたのは、ケンタッキー州立 Deaf School（聾学校）での授業である。自分自身初めて聾学校の生徒に教えるにあたって、言語以外の伝達手段、例えば、教授内容の図示や、実物教材の使用、身振りや表情等をより一層意識し

た。それに対して生徒の方も私の伝えたいことに積極的に応えようとする姿が見られ、約束の時間を大幅に超えても生徒たちの集中が途切れることは無かった。自分の日々の実践を振り返った時、ここまで「わかる」ことについて苦心した教材研究ができていたかどうかという根本的な問いを、海外での授業を経て逆に突きつけられたように思う。

このように、「HISTEP」は、自分自身の教育活動を振り返るとともに、一層深めていく上で非常に貴重な機会であったと確信している。社会科の授業では、実際に見せることができない事象を、様々な資料や伝達手段を使って、生徒に理解させる、つまり、可視化させることも必要な要素の一つだと考える。カナダ・アメリカにて実際に授業を行うことにより、今まで漠然としか見えなかったこと、気づかなかったことを自分なりに可視化することができたと感じる。今後は「HISTEP」の経験をより多くの日本の生徒たちに伝え、彼らが社会的事象を、そして自分自身を可視化する手助けとなれば幸いである。

HISTEP 2008 訪問学校一覧

訪問日	訪問地	訪問校・内容
4月28日	カナダ・トロント市	Balmoral Drive Sr. Public School にて、中学2年生対象の授業
4月29日	カナダ・トロント市	Tall Pines Primary Private School にて、第6学年（12～14歳）の生徒対象の授業
5月1日	アメリカ・ケンタッキー州	Boyle County Middle School にて、11～14歳の生徒対象の授業
5月2日	アメリカ・ケンタッキー州	Kentucky School for the Deaf にて、中学生対象の授業
5月5日	アメリカ・ニューヨーク市	John Paulding School にて、7～8歳のクラスへ参加
5月5日	アメリカ・ニューヨーク市	Sleepy Hollow Middle/High School にて、14～18歳の生徒対象の授業
5月6日	アメリカ・ニューヨーク市	Elizabeth Mascia Child Care Center にて参観

※その他、現地教員との意見交換会や施設見学等も行った。